

堀辰雄「聖家族」の装丁について

— 純粹造本とその行方 —

松 本 瑞 紀

一 はじめに

紙の書籍はその実体を持つ限り装丁とは不可分の存在である。装丁とは、本を形成する全ての要素を指し、またそれらをどのようなかたちで作るかということである。作品を構成する全てを整え作品内容を外部にあらわし、補強する役割を担う装丁は、その本がどのような意味を持つのかを探る糸口となる。

堀辰雄は装丁にこだわりを持った作家であったが、この観点からの研究は大藤敏行「堀辰雄の純粹造本」¹⁾など少数に留まる雑誌「四季」を自ら編集し、著書も編集し、他者の本の装丁を手掛け自装本も多く残すにも関わらず、編集者、装丁者としての堀辰雄は十分に検討されてこなかった。堀の著書の装丁は独自の美学が貫かれている。その美学はのちに「純粹造本」とい

う言葉で表されたが、これが最も鮮明に現れるのが一九三二（昭和七）年二月に発行された単行本『聖家族』である。

大藤は堀の「純粹造本」一般について論じたが、本稿では特に『聖家族』に着目し、堀の装丁美学を明確にすることを目的とする。そのため、本稿では作品内容には立ち入らないことを断っておく。

二 堀辰雄のこだわり

堀辰雄自身の装丁についての考え方は、理想の造本がどんなものかという問いへの答えに窺える。

ずっと田舎暮らしをしてゐるせいか、陰気な部屋の中でよりも、戸外の明るい気に入つた場所で読書することの楽しさを覚え出したので、いまの僕にはそれを手にしてゐて

もすこしも散歩の邪魔にならないやうな本でなければ書物本来の価値、伴侶としての価値が殆んど半減されてゐます。よほどの大物でないかぎり、大概小型で出してゐるヂツドなども、自分の本がいまの僕みたいな流儀で読まれることを彼自ら欲してゐるからではないかとさへ僕には思はれるのです。

『狐の手套』（野田書房、一九三六年三月）についても堀は「本は美しく楽しく、ポケットにちよつと入れられるやうな、小さな本にして貰つた。」と記し、堀自身は小さな本が好みであつたことがわかる。

実際、『聖家族』（江川書房）や『麦藁帽子』（四季社、一九三三年十二月）、『幼年時代』（青磁社、一九四二年八月）などは縦十六センチほどの小ぶりな本である。その他にも、ゆくゆくはこの翻訳を出版したい、といった漠然とした所望に「小型の」または「小さな本にでもして出したい」との言葉が堀の文章に散見される。外へ持ち出して電車や喫茶店や木陰で本を読みたい、そのためには小さいものがよいという堀の嗜好は一貫している。

堀は本の大きさだけではなく装丁全般、紙質、活字の大きさといった細部にも関心を及ぼしていた。「散歩の邪魔にならないやうな」という発言に表れるように、彼のお好みはシンプルな装丁であつた。『美しい村』についての「装幀のことは野田君が書いてくれるだらうと思ふ。僕はあんまり凝つた本は嫌ひだ

から、そんなものは期待しないで欲しい。僕は何気ない装幀が一番好きなんだ。」という言葉にその思いが表れている。

紙についても堀は言及する。夢の中で見た本は「白いアートペーパーの表紙の本だつた」という記述や、ドイツ語は読めないのにInge版のゲエテ詩集を買い、「薄いLeinen紙の指ざはりが、まことに気持がいい」ためにただあちこち捲つていとう記述は、彼が用紙に関心を持っていたことを示す。読めない本でもただ触つてゐるというのは、それだけ本というかたちを愛していたことの証左である。堀は本の外側から中身にまで視線を向けていた。

他にも第一高等学校時代の思い出に、買ったが高くて買えなかつた「あの水色の表紙の小さな英訳本」、「水色の小型な『スタヴロギンの告白』」があつたと回顧し、萩原朔太郎の『青猫』について「十年ばかり前の、もつとざらざらした紙に印刷され、もつとちぐはぐな挿絵の入つてゐた『青猫』の初版」を手に入れて「黒いマントのなかにその黄いろいクロオスの本をいつも大事さうにかかへて歩いてゐた」と語る。本の内容よりもむしろ外側の色や大きさ、手触りが堀の記憶には残されていた。堀は若いころから本のかたちそのものに注目していたのである。

加えて、堀が造本にこだわっていたことは当時の関係者にも知られていた。

山本書店を創業した山本武夫の文「堀辰雄と造本」に以下の

ようにある。

堀辰雄は文章を大切にするとおなじ調子で造本を大切に
した。作家は文章だけで終るのが普通だが、堀辰雄は造本
完了までを彼の文学の中へ入れているとも見られよう。紙
質、活字、表紙、カバー、かぎり、隅から隅まで彼の神経
のとおりなものはない。ずいぶん面倒の注文を出して私
を弱らせることもあった。注文に応じて新しく活字を作ら
せたこともあるし、表紙の皮を実際に見たいと言って製本
やまで一緒に行つたこともある。清刷りをはさみで切り抜
いて表紙にくっつけて位置をかえて見るのだが、満足する
まではいつまでも位置を動かして見つめている。室生犀星
氏の言葉をこゝでお借りすると「一日の命のあたひをてい
ねいに手のうへにならべて、効はりなでさすつて」という
態度が造本ぶりにもそのまゝ、言えると思う。だから、本が
出来上がるまでは気になつて何回も訪ねて来るし、私の方で
も相談しないでは仕事をすゝめられない気持ちになつてそ
の都度訪ねて行く。厄介なことだつたが、お茶のみながら
話しながらの仕事だと、すんだあととは一緒に散歩したりす
るのだから、私にとつても楽しい時間だつた。⁹⁾

文章を書きおえて完結するのではなく、本を造り上げることま
でが堀にとって重要な仕事だったのである。

山本同様、編集者としての立場から堀の造本について述べた
文章をもうひとつ引用したい。『晩夏』（一九四一年九月）を出

版した甲鳥書林に所属していた矢倉年の寄稿文である。

書物を作るのに堀さんほどに判つきりと自分の好みを出
された作家は又稀しい。

それには堀好みという一貫したものがあつて、それに
よつて自身本づくりを楽しんだ人であつた。

そしてどの書物にも細かな注意が造本の上に払われてい
る。私の経験の一つを言うと、行間に入れる約物のカット
についていろいろ新しいものを物色したあげく、堀さんが
自分で描かれたことがあつた。『晩夏』という本の中のカッ
トがそれである。

大体堀さん好みは書物に軽快さを出すことをねらつたも
ので、背を角山にしたり、装幀に絵を入れなかったり、活
字の配列について余白を生かす様氣をつかったなぞこのた
めである。

本文の見出しは、必ずベタ組にして短かくおさめ、次の
本文との行間を空ける。本文はびつちり詰めるが天地左右
は充分にとつておく。目次に雨ダレは殆んどなくノンブル
だけ或間隔にぼつんと置くという仕組でみな軽快さのため
である。

口絵は好んでよく入れられたが、中扉に色刷りのタイト
ルがすきで、藍やセピヤのインクで刷られたものがある。¹⁰⁾

(後略)

本というかたちすることに細部まで配慮をおしむことのない

堀の姿が記される。堀のいう「何気ない装幀」とは手を入れな
いということではなく、清明さ、純粹さをつき詰め考えぬいた
上で造り上げることである。

堀自身も関係者も述べるように、堀の書籍の装丁はシンプルの
の一言に尽きる。絵入りの表紙は殆ど無く、書名と著者名、出
版社が記されるのみで、それらの文字すらないものもある。表
紙はおおよそ一色か、でなければ背と小口側上下の角部分に色
変わりの紙や布、革を使用するばかりである。同時代の書籍の
流行は絵入りや色表紙の例も多く、堀の造本は特異なもので
あった。

堀は自著だけでなく、他者の作品の装丁も手掛けた。ひとつ
に川端康成『高原』（甲鳥書林、一九四二年七月）、ひとつに津
村信夫『父のゐる庭』（白井書房、一九四二年十一月）があり、
どちらも無地の表紙に題簽をつけるのみにとどまる非常に簡素
なつくりで、他著にも堀の好みが反映されていることが分かる。
なおそれぞれ初版五千部再版三千部、初版千部と記録があり、
堀作品の出版部数の少なさが浮き彫りとなる。

ただし堀は無策で簡素な装丁ばかり行っていたわけではなく、
芥川龍之介『地獄変』では紙や布、活字に徹底的にこだわりの
手の込んだ装丁からは堀の芥川に対する敬愛を感じ取れる。堀
は作品を適切に彩り表現する方法を考えたと上で、選択肢の一つ
として簡素を選んだのだということを強調しておきたい。

三 二つの出版社と純粹造本

以上のような堀の造本の美学が最も鮮やかに表れているのが
『聖家族』であり、その出版において重要な役目を果たしたの
が江川書房と野田書房である。

江川書房は一九三二年、江川正之が起こした出版社で、
一九三二年二月『聖家族』限定版を処女作として活動を始め、
十一冊の限定本と限定版雑誌を出版し、一九三三年に活動を終
了した。その後の動向としては日本広研に所属し広告事業に携
わっていたようで、『日本電報』や『宣伝』に名を見る事がで
きる。

江川正之はもともと白水社に勤める編集者・校正者であつた
が、二十二歳の時に独立し、白水社での経験を活かして限定版
の出版を行っていた。この間も日本カルピスに勤め、出版は趣
味であると語っている。この「趣味」というのは道楽を意味せ
ず、おそらくは生きる上で不可欠なものという意味合いを含ん
でいるだろう。彼は本に対して非常な情熱を持ち、貧乏でも体
調が悪化しても江川書房の活動を続行しようとしていた。

江川の校正者としての一面は「校正至難」の文に見る事がで
きる。校正者は間違いがあつたときにだけその存在を認められ
る、世にも果敢ない仕事であり「本の生命線を確認するために
尽力した校正者の労を稿ふ（※ママ、稿の誤植か）意味からい
つても、装幀者と同様に並記さるべきもの」であるといふ。本

を作り上げるのに誰が関わり、何が重要な役目を果たすのかについて江川なりの理解があった。

もう一点、江川が独自のこだわりを持っていたものが奥付である。奥付で本のなたるかが分かる気がするのだと、自分自身の経験から「奥付から造本家が彼の一作品に注いだ愛情と熱意の多寡が感じられる」ように思うと述べる。奥付には詩も文章もなく、ただ出版法に規定された事項が記載されていればその役目は果たされる。しかし江川は「凝れば凝る程、洒落れば洒落るほど、奥付の組立は、装幀に気圧され、本文に牽制され、いかにして両者の美を汚さないかに汲々としなければならぬ。どの道、文句は極つてゐる。いい加減な本なら、極り文句を右から左へ並べて置けばそれでも用は充分足りる。が立派な本で、他のものもろの個所に十二分の苦心が注がれてゐるのに、奥付だけが継子のやうに右から左への一列縦隊式だと、生みの親の愛情を疑つて見たくもなる次第」とまで言う。

「好きな造本の過程でこの奥付の組立ほど深刻に悩む問題はない」という江川がこの悩みを味わわなかったのは東郷青児訳『怖るべき子供たち』（一九三〇年九月）と堀辰雄『聖家族』の二度のみで、どちらも奥付のレイアウトの指定をもらつたためだという。つまり堀は『聖家族』を作る際に奥付という細部まで注視しており、それは江川の造本についての考え方とも一致するものであった。

野田書房は一九三四年に野田誠三が立ち上げた出版社である。

野田誠三もとは三才社の出版部に勤務していたが、三才社で出版予定だった『美しい村』の企画を持って独立。一九三四年四月、堀辰雄『美しい村』限定五百部を野田書房の名で刊行して活動を始め、十六冊の限定本、「コルボオ叢書」十二冊、またいくつかの普及版書籍や雑誌を出版した。一九三八年四月に堀辰雄『風立ちぬ』限定版を出版した三週間ほどあとに野田誠三が自殺したことで、実質的に活動を終了した。

野田も江川と同じように本づくりに対する情熱を持っていた。彼は野田書房の限定版の価格が高いと言われてこう言い切る。

野田書房の本は高いと云ふ、冗談いつちやいけぬ、野田書房の本が高いのではなく、外の本が安すぎるのです。即ち外の本が、余りに粗雑すぎるのです。

苟も書物をほんたうに説まうとする以上、値段さへ安ければ、どんな本でもいい、など、そんなみじめな気持は、捨て、戴きたい。三度の御飯を二度にへらしめて、僕はやつぱりい、本が欲しい。考へても御覧なさい、このせち辛厭な世の中に、せめて本を手にして居る時だけは、周囲を忘れ、王侯貴族の如き豊かな気持で居たいでは有りませんか！ それのみが書物を愛する者にのみ与へられた醍醐味ではないでせうか。

それを何事ぞ、野田書房の本は、い、ことはいいが、どうも値段が高くてね、——と情けないことをおつしやる。¹³⁾

大量生産の安価な本が多く出回る時世の中で己が仕事への矜持、

作品についての強い自信を持っていたことが、後世「野田本」として高く評価されていくゆえんであろう。

しかし残念ながら、高価な限定本は思うように売切れるものではなく、どちらの出版社も経済的には決して恵まれてはおらず、活動期間も非常に短いものとなった。若くして社を立ち上げこだわりの本を出版しながらもすぐに活動を終えてしまった点で似たように思える両社だが、その関係性についての記録はない。しかし、野田書房は明らかに江川書房の本づくりをモデルとしていた。例えば江川書房の『半獣神の午後』（ステファヌ・マルラメ、鈴木信太郎訳、一九三三年）は野田書房の『大鴉』（エドガー・アラン・ポー、日夏耿之介訳、一九三五年三月）の、また『途上』（嘉村磯多、一九三二年八月）は『肩車』（井伏鱒二、一九三六年四月）の手本となったという指摘がある。両者の双方への言及や記録がなくとも、江川から野田に受け継がれたものがあつたことは確実である。そして、ここに通底していたのが「純粹造本」という理念であつた。

「純粹造本」は中林雅士によれば、山内義雄が造本の一つの形を示すものとして定義し、野田書房において確立された言葉である⁽¹⁶⁾。山内は一九三五年発表の「純粹造本」という文章で「紙も、布も、あるひは革も、すべてが縹渺として消えてなくなる一種不思議な調和の上に成り立つ造本、言葉をかへて言へば、すべての要素が十二分に充足され、しかもそれらの要素が一卷の書冊に相聚つて、そこにかへつて一種の真空図を作り出すと

いふやうな「純粹造本」の企て⁽¹⁷⁾、（後略）」と述べた。中林は周到な心遣いによってこそ生み出され、「徹底的に素材にこだわりの、過度な装飾を排除することによって、本自体がもつ美しさや読みやすさを追求した」⁽¹⁸⁾のが純粹造本と称され、源流は江川書房の作品にも見られるとする。

野田書房に勤務していた堀尾勉は「野田誠三は決して造本の天才でもない」と書き記している。江川書房の作品をモデルにした野田書房の本が後に野田本と称され純粹造本を確立したといわれるようになったのは、堀辰雄の教示があつてこそだったという。

野田誠三は堀ファンでその何冊かを作り出したが、堀さんの造本のうまさ、感覚のよさは、氏の息のかかった本をみればすぐわかる。「狐の手套」を作ったときにも彼は堀さんのすぐれた感覚に三嘆していたが、堀さんの本を作ることははじまり、またそれで終った彼の短かい生涯を決定した堀的感覚、それが野田本の秘密ではないかと思う。

それは何かというと、つまり純粹造本なのである。決して画家の絵による装幀をしないこと、材料の質を極点にまで生かすこと、さりげなく飾らず、しかも全体にピリッと神経のゆきわたっていること。下手もの趣味をきらうこと⁽¹⁹⁾。

おそらく堀の中には以前から純粹造本に繋がる理念が存在しており、それを好みとして反映させたのが江川書房の『聖家族』、そして野田書房の『聖家族』なのである。

江川正之のちに『聖家族』について「著者の好みで背にも箱にも文字なしの純白装という——これ以上ささやかで、これ以上清潔な本はないという趣向だったが、私は正直、これを処女出版とすることに多少の物足りなさを感じないではなかったけれども、堀辰雄氏の造本上の神経の細かさは驚くべきものだったので、私は一言も私の意見を口に出さずにいたのである⁽²⁰⁾。」と記している。堀の造本に対するこだわりは、処女出版の江川書房においても遺憾なく発揮された。その時点では「純粹造本」という言葉では表されていなかったが、結果としてその出発点となる作品が出来上がったのである。

この堀の造本の美学は、同時期の「純粹詩」の理念とも深く関わるものと考えられ、ゆえに以後「純粹造本」との言葉が用いられたのであろう。長沼光彦によれば、一九二八年九月刊『詩と詩論』第一冊において、春山行夫らは、ヴァレリーが提唱しアンリ・ブレモンが理論化した「純粹詩」を揚言した。春山らに共通する「純粹」の意味は、「芸術から夾雑物を排斥すること」であった⁽²¹⁾。フランス象徴主義に造詣の深かった堀は、そうした夾雑物を排した芸術としての造本を目指していたように思われる。

四 『聖家族』の評価

では堀辰雄は『聖家族』についてどう言及しているのか。「『聖家族』限定版に⁽²²⁾」と題する文章では「いまさら自分の書

いた作品について何を言つたつて仕様がないのである。どの作品もそれを書いた後では、——殊に「聖家族」のやうなものは書かなかつた方がずつとよかつたのだらうと作者は思つてゐる。——それにもかかはらず、私は一生涯、この小説を書き続けてゐたあの苦々しい、けれども懐かしい日々を忘れることはないであらう。」と書きながらも、最後には「今度の本は自分の最初の本らしい本である。装幀も自分でやつて見た。そして序文も横光利一氏に書いていただいた。私はこの書を芥川龍之介先生の霊前にささげたいと思ふ。」としているから、強い思い入のある本といつてよい。

なお、堀は一九二一年から雑誌投稿を始め多くの作品を発表しているが、『聖家族』以前に単行本として出版されたのは一九二九年四月刊『コクトオ抄』（現代の芸術と批評叢書1、厚生閣書店）と一九三〇年七月刊『不器用な天使』（改造社）のみである。『コクトオ抄』はジャン・コクトーの翻訳作品集であるから、堀自身の作品集として初めてのものは『不器用な天使』となるが、これは新鋭文学叢書シリーズの第九篇で出され、全巻同じデザインで統一されていた。「自分の最初の本らしい本」という言葉はこれを指して、初単行本ではないけれども最初の本のようなのだと言っているのだろう。

その他選集や作品集で『聖家族』を書き上げた際の思い出の言及はあるものの、装丁に関しての記述は見当たらない。

江川本・野田本を具体的に見てみたい。（以下図1〜3は全

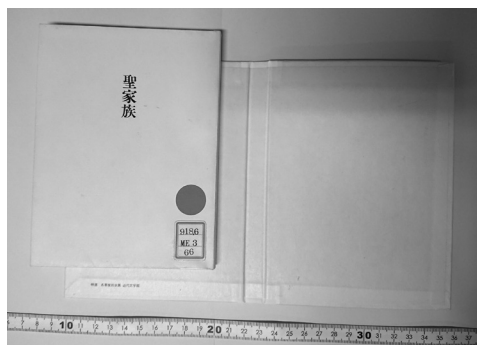


図 1

て江川本の復刻版、青山学院女子短期大学図書館所蔵)『聖家族』は一九三〇年十一月号(十月一日発行)の『改造』第一二巻第一一号に発表された。江川書房からの刊行は一九三二年二月二〇日で、限定五百部発行であった。うち百五十部は一番から一五〇番までの記番入り、越前局紙刷り、著者署名入りで定価二円、残りの一五一番から五〇〇番までの記番入り三百五十部は木炭紙刷りで定価一円半にて頒布された。判型は菊半裁判、記載頁数は七三頁。

野田書房からは一九三六年一月五日に刊行された。限定八八部発行で、著者自著あり、越前産別漉耳付局紙刷り、六十部のみが定価五円で頒布された。奥付には八十部のうち「第一番より第十五番にいたる十五部をば著者堀辰雄自家本となし、また第十六番より第二十番にいたる五部をば刊行者野田誠三寄贈本となす」とある。判

型は新菊判変形、記載頁数は七三頁。

どちらも本文は五号活字であるが江川版は三十字詰め十一行の組版で、野田版は三十一字詰め十一行の組版である。判型は大きく異なるが、どちらもフランス装(三方折り込み表紙、仮表紙挟み(江川版は背クロスヒラ紙貼り、野田版は背革ヒラ紙貼り。硬い表紙)、天アンカット、函入りである点、そして本体、仮表紙、函の三点すべて白で統一されている点が共通する。

判型が大きく異なるためどちらが優れているかという点に議論が集中しており、おおむね野田書房のほうに軍配が上がつている。駒井清次郎は野田版のほうがゆつたり印刷してあるので「江川版より感じがよい」と野田版を評価し、高橋啓介も野田本の書容はいわば江川本の二番煎じであるとしながらも「野田本がすっきりとして端麗で、江川本はどちらかと言えば窮屈である」と述べる⁽²⁾。

しかし堀辰雄の好みが小さな本であったことを考えると江川書房版をこそ評価すべきではないか。高橋は「市価も野田本の方がかなり高い、というのは、一般の人氣が野田本にある、ということを示している」というが、これは単純に出版部数の問題と思われる。

野田版のほうが行の文字数が多いが、一文字の違いであること、野田版は上下左右の余白をかなり広くとっていることから、対照しても文字数の差はさほど目につかない。野田版のゆつ

たりした感じはこの広い余白による印象で、確かにこちらのほうが全体の「白」という空間をより意識させる。

また表紙・扉の「聖家族」という題字も野田版のほうが字間を広くとって組まれている。ノンブルは江川版はページ下部中央に、野田版はページ下部の各小口側端に入れている。野田版はこういった間の取り方によって手に取った者、読む者に落ち着いた印象を与え、文字の世界への没入を誘い、結果評価が高まったのではないかと想像する。

しかし重ねて言うが私は江川版を支持したい。堀は理想の造本を「散歩の邪魔にならないような」ものだと語っていたのだ。江川版の、大人の片手ほどの大きさこそこの理想に合致している。江川版の大きさであれば小さな鞆にも、ポケットにでも入れて気軽に外へ連れ出すことができる。硬い仮表紙がついているから折れや傷の心配はあまりせずに済むだろう。仮表紙から外せば本体は柔らかくしなるので、文庫本のように片手でぱらぱらと読み進めることもできる。堀の「陰気な部屋の中でよりも、戸外の明るい気に行った場所です」読みたいという意識が表れているように思う。出版順から考えても、江川版という前例が無ければ野田版はこの白一色の装丁にならなかつた可能性もあり、江川版を評価するには十分な理由がある。

余白について考える。ウィリアム・モリスは『理想の書物』⁽⁵⁾の中で紙の上の版面の位置を考慮する必要性について述べる。本の単位は見開き二ページとして考えるべきで、ページの内側

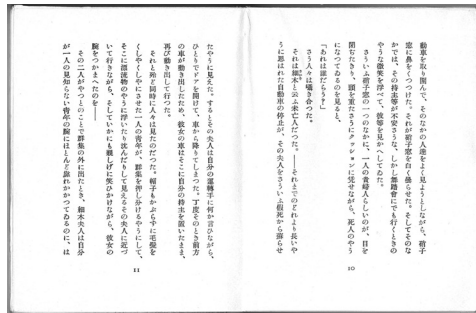


図 2



図 3

の余白は最小にとり、天の余白はこれより広く、外側はさらに広く、そして地の余白を最大にとると釣り合いがとれる。

この法則によれば、一見した限りで版面として美しく見えるのは野田版である。しかし仔細に観察すれば、江川版も法則に従った余白の取り方をしていることが分かる。加えてウィリアム・モリスが言及しているのはあくまでも欧文書籍であり、右綴じ、縦書き、日本語活字の書籍では感じ方が異なる点にも留意せねばならない。江川版は机に置いて見開きで読み進めるといふよりは手に持つて読むことを想定した判型であり、この余白でも

充分余裕があると感じられる。堀は活字や行間にも注意を払ったということだから、この本においては余白を広く取るよりも読み易い活字の大きさと字の並びを優先したものかもしれない。

江川がレイアウトを指定されたという奥付を見ると、確かに他の書籍とは趣が異なる。通常奥付には書名、著者名、出版社、出版年などの情報が簡条書きのごとく記されるものであるが、江川版『聖家族』は字の高さを揃えて羅列する形式である。堀はこのベタ組の組版を好んでいたらしく、野田版『聖家族』の奥付前注記や『ルウベンスの偽画』（江川書房）奥付前注記及び奥付、『美しい村』（野田書房）奥付前注記、『物語の女』（山本書店）扉と奥付二箇所、『堀辰雄詩集』（山本書店）奥付に同様の組版を確認できる。江川書房、野田書房の他の書籍を見れば組版の違いは一目瞭然で、堀の指定であることが明らかである。奥付は本文と違い読み込む部分ではないため可読性を重視しなかったのであろう。見えない四角の枠の中に収まったような配字により、整然とした印象を与える効果を狙ったものかと考える。奥付であろうとも手を抜かない堀の意識の細やかさがうかがえる。⁽²⁶⁾

次に紙についてだが、局紙とは福井県越前で作られる和紙を指し、大蔵省抄紙局が製造・認定したことからその名がついた。もとは紙幣用として開発されたミツマタを原料とする用紙で、紙質が緻密で耐久性にも優れ印刷にも適正があることから広く使用された紙である。木炭紙はその名のとおり木炭と相性がよ

く、質の目が入っていることを特徴とし、デッサンによく使用される。どちらも希少な用紙ではないが、別渡しは別注で渡いた紙ということだから、この本のために漉いたものと思われる、これも出版部数の少なさの要因だろう。

函、仮表紙、本体表紙、本文まで白で統一していることは、大藤敏行が「堀辰雄が白を好んだ」という点から論証している⁽²⁷⁾。大藤によれば堀の友人・神西清が『文芸』堀辰雄追悼号に「白い花」という題で文章を寄せており、堀辰雄は白い花を好んでいたことが示されている。また恩地孝四郎の言及もひかれており、堀が白好みであったことと、彼の本に白が多いことを恩地までも認知していたことが分かる。これは単なる好みだけでなく、堀が自身の作品を彩るための色が白であったのではないかと考えられる。

堀の作品において表紙に白色を使用したものは数あるが、ここまで白を極めて作成されたものは他にない。『聖家族』と同程度のシンプルさを誇るのは創元社刊『菜穂子』（一九四一年一月）であろうか。これは真っ白な表紙に四角い枠線が空押し加工されていて、書名、著者名、そして創元社の名だけが刷られた形式であるが、ボール紙と思われる函に書名等の書かれた青紙が貼られており、全体の統一感、また純粋さでいえば『聖家族』には敵わない。

繰り返しになるが、『聖家族』は堀辰雄の手掛けた最初の単行本であり、彼の好みや意志が多く詰め込まれている。文量の

少ない作品を一冊に仕上げたのも、一つの作品が他のものと混ざることなく、そのみで受け取られることを求めたゆえと考えられる。子細を知らなければただ簡素な装丁に見えるかもしれない。しかしこれは手を抜いた単純さではない。静謐な美しさをまとい、作品とのみ相対するために考え抜かれた末の「純白装」である。

五 その後の「聖家族」出版物の調査

しかし残念ながら、堀のこうした思索の詰まった装丁が、その後に出版された「聖家族」において継承されることは多くはなかった。それは時代の出版事情や出版目的など様々な要因による。末尾の表は、「聖家族」が収録された書籍を調査したリストである。現在までに七十四点の書籍を確認した。

調査方法は、『近代文学研究叢書』第七十三卷（昭和女子大学近代文学研究室、一九九七年十月）収録の「堀辰雄著作年表」（調査者福田淳子）を基本情報源とし、国立国会図書館サーチでタイトル・聖家族、著者・堀辰雄での検索結果を照合、「聖家族」を収録する出版物一覧を制作した。その上でできる限り実物から書誌情報を確認した（なおここで、データとしては存在が認められるが実物に当たることができない書籍が数点あり、これらは今回のリストには含めなかった）。

リストで明らかなのは「聖家族」の収録は多くが全集や作品集であること、現在に至るまで堀作品の出版が継続しているこ

とである。

前者に関して、文学全集と判断されるものは三十二点ある。田坂憲二は戦後の日本文学全集は一九五〇年代前半に花開き一九八〇年頃には冬の時代を迎えると総括するが、「聖家族」一覧に見られる全集の発行年はまさしくその指摘通りの年代に重なっている。全集ブームの中で堀辰雄の作品が採択され、時代に忘れられることなく読み続けられていたことがわかる。平成に入ってから出版数は少ないが、70以降の書籍は二〇〇四年の著作権切れをきっかけとして出版されたものと考えられる。七十四の出版物の中で堀の意識が組み込まれていると思われるものは、堀辰雄全集及び作品集のうちの数点のみである。

全集の装丁を見比べた時、特異で目にとまるのは24、新潮社版全六巻の堀辰雄全集である。文学全集に限らず、本の判型としてはこのような正方形に近いものは珍しい²⁹。当該書の刊行の言葉には「内容にふさわしい清楚な造本は、真に愛蔵に耐え得るものであることを信ずる」との文言があり、言葉どおり非常にすっきりした印象を与える。縹色の表紙に白い背クロス、背にだけ静かに記された文字が調和し、そのバランスはおそらくこの大きさ、このかたちでしか成立しないように思われる。本文の組版も美しい。通常の書籍よりも横幅が広いため行数が多いが、一行の文字数は先に出た新潮社版全七巻のものと同じ三十九文字で構成されている。見開きの状態で、本文ページが一般的な書籍よりも視界に広く映り、またページをめくる回数

が減ることで、作品への没入度が高まる。

この清楚な造本こそ、堀辰雄自身の好んだ「純粹造本」を念頭に置いた装丁であろう。配色は『麦藁帽子』（四季社）を彷彿とさせ、落ち着きのあるシンプルな見た目をしている。利便性の観点からいえば特殊判型の書籍は本棚に収めにくい。しかし揃いで入手される本をこの判型にし、極力装飾を廃し、出版社として売ろうと考えたうえで著者の意を汲んだのであろう点は評価されなければならない。

他の全集については特に組版に着目したい。「聖家族」の章分け、行のあき方といった形式の面にはいくつかの問題がある。初版本には一行あき、二行あき、三行あきなどの行間の区別があるが、全集では必ずしも反映されていない。調査研究を利用目的とする全集においては掲載文の正確性により留意する必要がある、この編集方針について解説が記載される。

新潮社全七巻版（17）では「初版本の体裁をそのまま踏襲することは不可能に近い」ため行間は原則的に一行あき、四行あきで中央に二種の二種類に統一されている。また角川書店版でも初出を反映せず、初収単行本の行あきをすべて一行あきとする角川版作品集の形式を取っている。行間をどう取るかはその書籍の編集方針によるが、全集は多くの作品を一冊に収める必要がある、また複数の作品を同時に収録する関係上それらの体裁を統一しなければ閲覧に難が生じる。重視すべきは初出時また初収時の体裁よりも本文とその内容であり当然の方針とい

える。

これらと異なるやり方をとったのが筑摩書房版（61）である。「初収単行本の姿、つまり行あきのとり方に、音楽の休止符に二分、四分、八分、十六分とあるのに似て、息遣ひの緩急を見せてゐる趣をみるから」これを何とかそのまま生かしてみたいと述べる。その結果、「本全集では初収単行本の江川書房版、野田書房版などに従ひ、新潮社版を参照して行間の種類を三様に使用することとした。章は初出誌に従へば「I」から「VIII」までの八章あるが、あとの版では、初出誌での第「VI」章の存在が不明確なため、現行では全体で七章として取扱はれてゐる。これについては「校異」に記しておいた」という方法を選択している。

行あきに息遣ひを感じるといふ記述が興味深い。行あきの緩急は小説では意識しづらいが、詩歌で考えてみれば、空白や段落、行間を巧みに使い、ことばのテンポや読まれ方をコントロールしている作品は多い。詩を書くこともあった堀が小説においてもこうした意識を組み込んでいた可能性は当然考えられることであり、筑摩書房の編集姿勢はまったく正しいものといえる。次に作品集二点に関して、角川版（8、9）は堀辰雄の編集になる自選作品集で、毎巻末にその思い出や作品の由来が執筆されている。このあとがきでは装丁について言及はない。しかし編集を自身で行っており、装丁にも堀の意識が反映されているはずである。

書名のみが表記され、輸送用かとさえ思われるような簡素な函、そしてこれに収められた書籍自体も相当に簡素である。背は青字で書名を、黒字で「堀辰雄初期作品集」と記し、表紙表面には枠線を空押しし、青字で書名のみが記されている。中身も扉の題だけを青字に印刷している。思い出されるのはまさしく『聖家族』の装丁である。堀は「純粹造本」を追い求め続け、自選作品集にもその美学を注ぎ込んだのではないだろうか。

筑摩版(65)もいささか変わっている。上製本ではあるのだが、この表紙が少々柔らかく、曲げながら読むことができる。18cm少々という大きさも作品集にしては小型であろう。表紙が明るい水色の布貼りであるところも軽さを意識させる。活字はやや小さく、書籍の大きさと容量に合わせたものと考えられる。つまりこの本の装丁は「机に置いて広げて読む」ことを意識していない。厚みがあるため片手では無理かもしれないが、手に持って読むことを想定しているのは明らかだろう。床に座って、寝転がって、机に向かって、様々な状態で堀辰雄の作品を気軽に手に取り、読み進めるための装丁なのである。これは全集ではなく作品集という形式をとったことでこそ設定できるコンセプトではないか。すべて解題が付され、多少の調査研究にも耐えうるが、同じ発行元・筑摩書房の全集が完結してから二年以内にこちらが刊行されたことも考えると、全集とは異なる目的意識で出版されただろうことは確実といつてよい。

六 おわりに

これら以外のそれぞれの書籍も、特異な装丁や言及すべき背景が認められる。しかし時代を経る中で、堀が抱き、著作の出版であらわそうとし続けたいわゆる「純粹造本」の理念は希薄化した。本というかたちに元来含まれていた思想は顧みられなくなり、別の本のかたちの中に文字だけが押し込められるようになったのである。

当然のことだが、各本ごとに制作意図があり、出版理由がある。「聖家族」に限ってもこれだけの点数がみられ、それぞれに世に出された目的が存在するはずである。全体で見ても出版点数の多い堀辰雄の本たちは、彼の作品が求められ受容され続けてきたことを示している。しかしそのうち、堀が自分で作り上げた造本の美学が継承されているものはあまり多くない。特に現代においては画一的な判型、画一的な組版の出版物が跋扈し、カバーデザインのみにその差異を競っている状況である。

70『堀辰雄初期作品集』は堀辰雄文学記念館が編集した作品集である。この本はカバーも白く、本体も白い、静かな本である。この本に収録されている「聖家族」は、章分けに「I」の記号が使われている。これはどの堀辰雄全集も採用していない、初出誌にだけ見られる表記である。文学記念館の編集であるから初出を重視したものであろう、装丁も初収の作品を参考にしたと考えられる。判型こそ一般的な単行本と変わらない大きさ

だが、この真つ白な装丁は堀の思想を汲んだものだ、私には思えてならない。作品の収録順はおおむね初出順となっており、その「初期作品」の最後を聖家族で締めくくるからには「聖家族」という作品への注目がなかったはずはない。この本は『聖家族』の意図を継承し、「純粋造本」の意識を組み込んだものであるといえる。

形のある、物として作られ世に出された「本」には、どんなものであっても必ず作り手の意図が隠されている。堀辰雄の『聖家族』は彼の「最初の本らしい本」であり、その美学は今こそ顧みる必要がある。

本稿では作品内容には言及しなかったが、装丁が作品と結びつく役目を負う限り、作品を読み解くことも必要である。内容と装丁との結びつきについてより深い考察の視点を持つことを以後の課題としたい。

注

- (1) 大藤敏行「堀辰雄の純粋造本」『文学』第一四巻第五号、二〇一三年九・一〇月
- (2) 『本』第三号、江川書房、一九三三年九月（筑摩書房版全集第四卷所収「理想の造本」）
- (3) 『手帖』第五号、野田書房、一九三六年三月（筑摩書房版全集第四卷所収「狐の手套」に就いて）
- (4) 『ヴァリエテ』第五号、野田書房、一九三四年四月（筑摩書房

版全集第四卷所収「著者の言葉」文中の「野田君」は野田誠三のこと。

- (5) 堀辰雄「狐の手套」『本』創刊号、江川書房、一九三三年二月新潮社版全集第五巻収録時「本のこと」と改題。

- (6) 『帝国大学新聞』第五五二号、一九三四年一月二八日発行（筑摩書房版全集第四巻所収「浴泉記」など）

- (7) 堀辰雄「スタヴロギンの告白」の訳者に「（筑摩書房版全集第四巻所収）

- (8) 堀辰雄「青猫」について」（筑摩書房版全集第四巻所収、同書「二三の追憶」にも同様の記述あり）

- (9) 山本武夫「堀辰雄と造本」『堀辰雄全集1』月報第一号、新潮社、一九五四年三月

- (10) 矢倉雄「堀さんの本づくり」『堀辰雄全集4』月報第四号、新潮社、一九五四年九月

- (11) 額川政由紀（『江川正之のこと』「校正至難」）『本』第三号、江川書房、一九三三年九月

- (12) 江川正之「奥付と愛情」『本』第一号、江川書房、一九三三年四月

- (13) 野田誠三「手帖後記」『手帖』第五号、野田書房、一九三六年三月

- (14) 「今でこそ野田本などというけれど限定百部が完全に売れたためがないし、限定四十七部などというまるでママゴトのような数でもアッサリ売れてくれなかったのであるから、母親のやって

いるタバコの売上げを強奪して紙さがしにゆくというありさまである。」(堀尾勉「野田誠三のこと」今村秀太郎『江川と野田本』日本古書通信社、一九七〇年一月、三四～三五頁)

(15) 注(14)に同じ。『大鴉』には『半獣神の午後』を訳した鈴木信太郎造本と記載があることから関係があると考えて差し支えないが、『肩車』は著者自装との記載がみられ、『途上』は「江川正之装」と記載があることから、どこまで参考にしたかははっきりとしない。江川自身は「装幀といっても別に何もしてない」と書き残している。

(16) 中林雅士「純粹造本——江川書房と野田書房——」『圖書の譜』明治大学図書館紀要』創刊号、一九九七年三月

(17) 山内義雄「純粹造本」『手帖』第三号、野田書房、一九三五年一月

(18) 注(16)に同じ

(19) 注(14)に同じ、三二～三三頁

(20) 江川正之「江川書房物語」注(14)に同じ、八～九頁

(21) 長沼光彦「春山行夫と純粹詩」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』第四七号、二〇一七年三月。なお、アンドレ・ジッドはヴァレリーの「純粹詩」に刺激され、一九二六年発表の『贗金づくり』で神の視点を排除した「純粹小説」を提唱し、日本でもジッドに影響を受け横光利一が「純粹小説論」(『改造』一九三五年四月号)を発表した。他に純粹との言葉を冠した同時期の文学作品には、河上徹太郎『自然と純粹』(芝書店、一九三二年)、西脇順三郎『純

粋な鷺』(椎の木社、一九三四年)、川端康成『純粹の声』(沙羅書房、一九三六年)などがある。加えて、一九二〇年代後半から三〇年代にかけては「純粹哲学」「純粹認識」「純粹論理学」「純粹心理学」「純粹教育学」「純粹法学」「純粹経済学」などを題する本が出版されている。一九二七年にカント『純粹理性批判』の再訳が岩波書店より刊行されたことが大きな刺激となっていると推測されるが、この時期の分野横断的な「純粹」への志向については今後さらに検討を深めたい。

(22) 堀辰雄「聖家族」限定版に「限定出版江川書房月報」第一号、江川書房、一九三二年二月(筑摩書房版全集第四卷所収)

(23) 駒井清次郎『日本の限定本』書物展望社、一九五二年一月、五一頁

(24) 高橋啓介『蒐書三昧 限定本彷徨上巻——秀作限定本の展望——』湯川書房、一九八七年二月、一〇五～一〇七頁

(25) ウィリアム・モリス『理想の書物』(川端康雄訳) 晶文社、一九九二年一月、一五二頁 言及自体は一九九三年の講演である。

(26) 形式の似たものに北園克衛『郷土詩論』があり、今後の調査が必要である。

(27) 注(1)に同じ

(28) 田坂憲二『日本文学全集の時代——戦後出版文化史を読む』慶應義塾大学出版会、二〇一八年三月

(29) 江戸時代の枅形本との関係も考えられる。今後の課題とする。
(まづもと・みずき／本学大学院博士前期課程修了)

	書名	副書名・巻数	版表示	出版社	出版年月日	形態	ページ数	大きさ
1	聖家族			江川書房	1932.2.20	フランス装・仮表紙・函	73	菊半裁判
2	聖家族			野田書房	1936.1.5	フランス装・仮表紙・函	73	新菊判変形
3	聖家族		普及版	野田書房	1936.10.20	並・フランス装	186	17.6×13.0
4	聖家族	昭和名作選集		新潮社	1939.8.6	並	5,290	
5	燃ゆる類	青春の書、1		鎌倉文庫	1946.5.25	上・仮フランス装	232	18.8×12.8
6	聖家族	昭和名作選集	[戦後版]	新潮社	1947.10.20	並	5,290	18.2×12.8
7	燃ゆる類	新潮文庫		新潮社	1947.11.30	並	312	15.0×10.3
8	聖家族	堀辰雄作品集、1		角川書店	1949.3.5		3,311	
9	聖家族	堀辰雄作品集		角川書店	1949.8.20	上・みぞ・角背・[函]	312	18.7×13.1
10	堀辰雄集			新潮社	1950.6.15	並	584	18.3×12.8
11	現代日本小説大系	現代日本小説大系、45、[モダニズム、3]		河出書房	1952.5.15	上・みぞ・丸背	344	18.5×13.8
12	現代日本小説大系	現代日本小説大系、45、[モダニズム、3]	特製版	河出書房	1952.5.15	上・みぞ・丸背	344	
13	菜穂子・風立ちぬ			新潮社	1952.6.28	並・カバーなし	244	19.0×13.2
14	聖家族・美しい村	角川文庫、442		角川書店	1952.7.15	並・カバーなし	184	14.9×10.6
15	菜穂子・聖家族	現代日本名作選		筑摩書房	1952.12.25	並・[カバーなし]	211	18.8×13.0
16	堀辰雄集	昭和文学全集、18		角川書店	1953.7.25	上・みぞ・丸背	414	20.8×14.9
17	堀辰雄全集	堀辰雄全集、1		新潮社	1954.3.31	上・みぞ・丸背・函	445	21.2×16.2
18	梶井基次郎・三好達治・堀辰雄集	現代日本文学全集、43		筑摩書房	1954.5.25	上・みぞ・丸背・[函]	431	22.5×15.5
19	風立ちぬ	新潮青春文学叢書		新潮社	1954.12.10	上・みぞ・角背	147	17.9×10.8
20	「文藝」	第13巻、第8号	増刊号	河出書房	1956.5.15	並	412	21.2×15.0
21	「文藝」堀辰雄読本	第14巻、第3号	臨時増刊	河出書房	1957.2.15	並	268	21.2×15.1
22	堀辰雄集	昭和文学全集、18		角川書店	1957.6.30	上・みぞ・丸背・[函]	414	21.5×15.5
23	燃ゆる類・聖家族	新潮文庫	16刷	新潮社	1957.12.20	並	180.7	15.2×10.6
24	堀辰雄全集	堀辰雄全集、1		新潮社	1958.5.25	上・みぞ・角背・[函]	322	17.9×16.0
25	堀辰雄	近代文学鑑賞講座、14		角川書店	1958.10.5	上・みぞ・丸背・[函]	387	19.6×13.9
26	堀辰雄集	日本文学全集、31		新潮社	1960.4.10	上・角背・函	521	17.7×11.5
27	堀辰雄集	日本現代文学全集、76		講談社	1961.7.10	上・みぞ・丸背・函	446	21.6×16.0
28	堀辰雄集	日本現代文学全集、76		講談社	1962.2.10	上・みぞ・丸背・函	446	21.6×16.0
29	鑑賞と研究・現代日本文学講座	小説7、現代文学		三省堂	1962.2.20	並	4,379	21.0×14.9
30	堀辰雄	昭和文学全集、17		角川書店	1962.7.25	上・みぞ・丸背・函	514	20.1×14.2
31	聖家族	堀辰雄全集、2		角川書店	1964.2.25	上・みぞ・角背・[函]	363	18.0×11.8
32	梶井基次郎・堀辰雄・中島敦集	現代文学大系、35		筑摩書房	1964.6.10	上・みぞ・丸背・[函]	491	19.4×14.2
33	堀辰雄	日本の文学、42		中央公論社	1964.9.5	上・みぞ・丸背・函	528	17.7×12.8
34	堀辰雄集	現代の文学、16		河出書房新社	1965.5.8	上・みぞ・丸背・函	492	17.9×12.8
35	風立ちぬ・聖家族他三編	旺文社文庫		旺文社	1965.11.10	並	233	15.1×10.6
36	堀辰雄集	日本文学全集、50		集英社	1966.9.13	上・みぞ・丸背・函	444	18.1×12.2
37	堀辰雄・林芙美子	現代日本文学館、30		文芸春秋	1966.12.1	上・みぞ・丸背・[函]	477	19.8×14.3
38	風立ちぬ・聖家族他三編	旺文社文庫	特製版	旺文社	1967.9.1	上・みぞ・丸背	233	15.6×11.3
39	梶井基次郎・三好達治・堀辰雄集	現代日本文学全集、72	定本限定版	筑摩書房	1967.11.20	上・みぞ・丸背・[函]	431	22.4×15.9
40	堀辰雄集	日本文学全集、II-15		河出書房	1967.12.5	上・みぞ・丸背・函	422	19.8×14.1
41	室生犀星・中野重治・堀辰雄	日本短篇文学全集、24		筑摩書房	1968.2.6	上・みぞ・丸背・[函]	263	18.7×12.3
42	堀辰雄	日本文学全集、26	[グリーン版]	河出書房新社	1968.12.20	上・みぞ・丸背・[函]	364	18.1×12.4
43	聖家族・燃ゆる類	角川文庫、442	改版初版	角川書店	1968.12.20	並	210(5)-8	14.9×10.6
44	堀辰雄集	日本現代文学全集、32	豪華版	講談社	1969.1.30	上・みぞ・丸背・函	448	21.5×15.8
45	堀辰雄・三好達治集	現代日本文学大系、64		筑摩書房	1969.8.5	上・みぞ・丸背・[函]	425	22.4×15.7

46	堀辰雄集	新潮日本文学, 16		新潮社	1969.11.12	上・みぞ・丸背・函	425	19.7×13.6
47	堀辰雄集	現代日本の文学, 20		学習研究社	1970.2.1	上・みぞ・丸背・函	448	19.4×14.2
48	燃ゆる頬・聖家族	新潮文庫, ほ-1-1	26刷改版	新潮社	1970.3.30	並・カバー	181. [9]	15.1×10.7
49	聖家族	特選名著複刻全集近代文学館		日本近代文学館	1971.5.10	フランス装・仮表紙・函	73	15.6×12.0
50	横光利一・堀辰雄	日本文学全集, 13		新潮社	1971.7.20	上・みぞ・丸背・函	516	18.0×12.1
51	堀辰雄集	日本文学全集, 50		集英社	1972.6.8	上・みぞ・丸背・[函]	451	19.6×14.3
52	日本の文学	日本の文学, 42、アイボリーボックス		中央公論社	1972.8.25	並	528	17.2×11.8
53	葉穂子 他五篇	岩波文庫, 31-089-2、緑89-2		岩波書店	1973.4.16	並・カバー	304	14.8×10.6
54	芥川龍之介・堀辰雄・中河与一・横光利一	近代日本キリスト教文学全集, 8		教文館	1974.10.10	上・みぞ・角背・[函]	270	19.6×13.4
55	近代小説 鑑賞と研究			東京堂出版	1975.2.15	並	385	18.2×12.9
56	梶井基次郎・三好達治・堀辰雄集	増補決定版 現代日本文学全集, 72	第2刷	筑摩書房	1975.3.20	上・みぞ・丸背・[函]	431	22.5×15.6
57	梶井基次郎・堀辰雄・中島敦集	近代日本文学, 32		筑摩書房	1975.8.30	上・みぞ・丸背・[函]	407	22.5×15.7
58	風立ちぬ・聖家族・葉穂子 他	現代日本の名作, 25		旺文社	1975.9.1	上・みぞ・丸背・[函]	424	17.3×12.8
59	聖家族	ジュニア版日本の文学, 50		集英社	1975	上・みぞ・丸背・[カバー]	300	19.5×13.9
60	梶井基次郎・堀辰雄・中島敦集	筑摩現代文学大系, 34		筑摩書房	1976.9.15	上・みぞ・丸背・[函]	491	19.5×14.0
61	堀辰雄全集	堀辰雄全集, 1		筑摩書房	1977.5.28	上・みぞ・丸背・[函]	695	20.6×16.1
62	文芸読本 堀辰雄			河出書房新社	1977.6.20	並	263	21.0×14.8
63	堀辰雄集	日本現代文学全集, 76	増補改訂版1刷	講談社	1980.5.26	上・みぞ・丸背・[函]	448	21.5×15.7
64	堀辰雄	鑑賞日本現代文学, 18		角川書店	1981.11.30	上・みぞ・丸背・[函]	445	19.4×13.7
65	堀辰雄作品集	堀辰雄作品集, 1		筑摩書房	1982.5.28	上・みぞ・丸背・[函]	389	18.5×13.8
66	文芸読本 堀辰雄		新装版	河出書房新社	1984.8.25	並・カバー	263	21.0×14.7
67	昭和文学全集	昭和文学全集, 6		小学館	1988.6.1	上・みぞ・丸背・[函]・天金	1129	22.8×16.5
68	近代小説のなかの家族	短編の愉楽, 3		有精堂	1991.8.10	並	iii, 232	21.0×14.8
69	風立ちぬ・聖家族	愛と青春の名作集		旺文社	1997.4.10	上・みぞ・丸背	268	17.5×12.4
70	堀辰雄初期作品集			軽井沢町教育委員会	2004.7.30	上・みぞ・丸背・[カバー]	254	19.7×13.5
71	ザ・堀辰雄	全小説全一冊		第三書館	2004.12.25	並・カバーなし・三方水色	343	26.0×18.5
72	聖家族	SDP bunko		SDP	2008.11.17	並・カバー	140	15.0×10.6
73	百年小説			ポプラ社	2008.12.10	上・みぞ・丸背・[函]	1331	22.7×17.3
74	自殺ブングク選 名文で死を学ぶ	オフサイド・ブックス, 56		彩流社	2010.6.30	並	189	21.0×14.8